

オフィスに縛られないデジタル・ノマドの急増

ニューヨーク在住のジャーナリストが切り取る、世界の未来を占う米国発の新潮流。

今回はコロナ禍で加速されたデジタル・ノマドという新たなワーキングスタイルの広がりを取り上げる。

ヨーロッパ諸国がコロナウイルスのパンデミックを克服して国をオープンにしたと聞き、今年の3月、パンデミック前に試みたができなかった、スペインのバルセロナ訪問を実現した。スペインの中でも独特な雰囲気と文化を持つこの街は、常に観光客で賑わっていて、この古都の財政は観光収入で賄われていると聞く。

この観光都市に、ここ数年、観光客でもない、またビジネス旅行者でもない若者たちがかなりの数、姿を見ている。「デジタル・ノマド(Digital Nomad)」と呼ばれる人種である。

デジタル・ノマドの台頭

いうまでもなく、デジタル・ノマドの姿を見かけるのはバルセロナに限ったことではない。セントラルパークの芝生の上、メトロポリタン美術館の巨大な階段の一角などに座って、コンピュータを操っている若者を見かけるのは、ニューヨークでも普通のことになっている。ただ、バルセロナはWi-Fi環境も良く、市民たちも彼らに対して親切で寛容、加えてこの街の食べ物も安くて美味しい。こういった条件が揃っているために、バルセロナはデジタル・ノマドの天国となっている。

ノマド生活に必要な情報を提供しているWebサイト「ブローク・バックパッカー(The Broke Backpacker)」は、2021年、世界には3,500万人のノマドがいたと報告している。経済的にも文化的にも先端に行く米国では、過去2年間にノマドの数が2倍に増加。2018年には480万人、2021年には1,100万人に上っている。

その平均年齢は意外に高く、32歳。ノマド生活が遊びやただの酔狂でないことは、彼らの70%が週に約40時間を仕事に費やしているというデータを見ればわか



スペイン・バルセロナに滞在しながら、ニューヨークの会社に勤めるテイラー・アクアン。彼女のようなデジタル・ノマドがコロナ禍を機に欧米で急増。それに伴い、彼らにテンポラリーな住居を提供するなど新ビジネスも生まれている

る。「やっぱり、仕事に使う時間が一番多い」と語るのは、ニューヨークの小さなデジタル会社、CSMスポーツ&エンターテインメントのシニア・コーディネーター、テイラー・アクアン(Taylor Aquan)。米国からバルセロナにやって来たノマドの一人だ。

彼女は大のテニスファンで、バルセロナ・オープンを見るために昨年の春、1人でバルセロナを訪れた。ほんの数日と思ったバルセロナがその数日のうちにすっかり気に入る、会社から給料をもらいながらこの街で暮らすために、会社にノマドになりたいというリクエストを出した。たまたま、1年前に自身がエクアドルで半年のノマド生活をした体験を持つ彼女の上司は、彼女の要求を快諾した。

テイラーのように、会社が快く外国でのノマド生活を許可する理由の背景には、パンデミックに入って間もなく米国で起きた「ビッグ・レジグネーション(Big Resignation)」と呼ばれる現象があると

『フォーブス』誌はいう。この時期、優秀な、やる気のある社員が大勢会社を辞めた。自分で仕事を始めたり、新しい分野を目指したり、現在より条件の良い会社に移ったりする若者が増えたのだ。これに対応するために、企業の多くは社員の要求を前より進んで受け入れるようになった。例えばハイブリッド通勤(会社に週2、3日出社し、後は自宅で仕事をする混成出勤のこと)をリクエストする社員が増えたとき、ほとんどの会社はそれを承諾した。『フォーブス』誌はこのトレンドについて「会社が社員の要求に耳を傾け、彼らのニーズに応える姿勢になったことはパンデミックのメリットだ」と書いている。ちなみに、パンデミック中に社員が最も多くリクエストしたのは、デジタル・ノマドになることだったとも同誌は報告している。彼らは夢見ていたフランスの葡萄園や芸術品に囲まれたイタリアの街で、のんびりと仕事をしたいと望んだ。米国の会社からもらう給料なら、ほとんどどこの国に行っても問題なく生活できるのも、アメリカ人にノマドが多い理由になっている。

この新しいトレンドを対象に、2020年には幾つかの新しいビジネスが生まれた。その中でも話題になっているのが「ブ



パソコンとネット環境さえあれば、街中どこでもワークプレイスに。場所に縛られない自由度の高い働き方を志向する若者たち

Seville Kaede

青山学院大学英米文学科卒業後、電通入社。クリエイティブ局を経て1968年に退社しニューヨークに移住。

以来、アメリカの広告界、トレンドなどに関する論評を各種の雑誌、新聞に寄稿。

著書として『ザ・セリング・オブ・アメリカ』（日経出版）、『普通のアメリカ人』（研究社出版）など。

翻訳には『アメリカ広告事情』（ジョン・オトゥール著）、『アメリカの心』（共訳）ほか多数あり。

『ブレン』『消費と生活』などに連載。

ルーフランド(BlueGround)」なる宿泊サービス会社だ。ブルーランドはAirbnbをアップグレードした住居のレンタル会社だが、Airbnbのように住居人から一時的に部屋を借りて旅行者に提供するのではなく、世界15都市に約4,000の家具付きの部屋を持っていて、ノマドを含む一時的な旅行者に貸している。部屋の内装に上質な家具や装飾品を取り入れ、「Airbnbよりずっと高級で住み心地がいい。Airbnbよりちょっと高いが、それだけの価値はある」と使用者の一人、ビル・克蘭シー(Bill Clancy)は語っている。

バルセロナのノマド、テイラーは、ノマド専門の不動産会社から家具付きの部屋を月5,000ドルで借りた。バスルーム付き2ベッドルームと居間、洗濯機と乾燥機付きの納戸がある高級住宅である。バルセロナの中でも若者たちが好むレストランや遊び場が最も集まるエリアで、観光名所にも歩いて行ける距離にある。5,000ドルという高い家賃の半分は、彼女が滞在中に訪問を予定している両親が払ってくれたという。

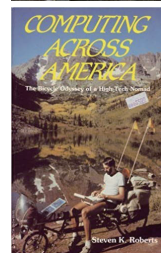
こんな恵まれた環境だったが、ノマドの多くが経験するように、土地柄を知らない旅行者には借りたアパートの住み心地まではわからない。「夜な夜な上の階でパーティがあり、ニューヨークとバルセロナの時差で、夜中にテレコミュートしなければならなかった私には辛い経験だった」とテイラー。彼女が米国人の間で評判の良いAirbnbを通してバルセロナのアパートを借りなかった理由は、「Airbnbは実際にどのようなアパートかを見たり、確かめたりしないという噂がある。だから避けた」そうだが、結果的には大枚月5,000ドルで借りた部屋は、外国からの

ノマド向きではなかったようだ。

前述したブルーランドは、こういった問題を避けるためにノマドを対象とした「ブルーランド・ノマド」と呼ばれる専用パッケージを作り、家具、Wi-Fiなど、彼らに必要なものを備えたアパートを、その土地の不動産屋を通してノマドに貸しているのだ。「好きな時に、好きな場所に素敵な部屋が借りられるのが、我が社のメッセージ」とは、ブルーランド創始者の一人、アレックス・シャテレフセリアウ(Alex Chatzieleftheriou)。そして「ブルーランドは、融通性、探検心のあるノマドの日常生活の不便さ、不安などを全て取り除くサービス」とも言う。また氏自身、若い頃に世界15都市に住んだ経験を持ち、「感受性の強い若いうちに地球上のさまざまな街、文化に触れる自由を味わってほしい。それを手助けするのが、このビジネスを始めた動機」とも。そしてこのビジネス・コンセプトは、オフィスの共有ビジネス、WeWork(ウィークワーク)から得たという。WeWorkがメンバー顧客にオフィスデスク、椅子、電話、会議室を提供しているように、ブルーランドのアパートは、デザイナーが選んだカウチ(長椅子)、ベッド、テーブル、大スクリーンのテレビ、洗濯機、ドライヤーなど、「カバンとコンピュータを持ってくれば、なんの不自由もなくその日から生活ができる場所を提供している」のである。

ノマド誕生の歴史

この新しいライフスタイルはどのように誕生したのか？ ノマドは1983年、スティーブ・ロバーツ(Steve Roberts)なる青年の自転車旅行から始まったといわれている。その年、彼はコンピュータを搭載した自家製の自転車で米国中を走り回っ



デジタル・ノマドの先駆けといわれるスティーブ・ロバーツ。コンピュータを携えながら自転車で全米を巡り、文筆活動を行った経験を披露したその著書『Computing across America』(1988年)は、当時の米国の若者の冒険心を大いに刺激したという

た。訪問した都市や村などに興味を惹かれると、数日をそこで過ごし、エッセーや旅行記事などを書いて、ニューヨークやその他の都市にある新聞や雑誌に寄稿する文筆活動も同時に行った。ノマド生活を終了した1988年、彼は『アメリカ全土をコンピュータと一緒に：ハイテック遊牧民の自転車冒険旅行(Computing across America: The Bicycle Odyssey of a High-Tech Nomad)』というタイトルの本を出版。彼が作り上げたこの特異なライフスタイルは、当時のアメリカの若者を大いに刺激し、結果として多くのデジタル・ノマドを生んだ。

ノマドの生活実態を見る

ブローック・バックパッカーは、ノマドの生活を擁護し、このフリースタイルの生き方を奨励するために、ノマドに関するさまざまな調査をしているが、それによると世界のノマドには以下のような特徴

があるという。

- ・多くは宿泊所としてホテル(51%)、友人、知人、家族などの家(41%)、Airbnb(36%)、自動車内(21%)、ホテル(16%)を利用。
- ・61%が既婚者。
- ・26%が、18歳以下の子どもを持っており、その子どもの多くがホームスクールやオンライン教育で勉強している。
- ・70%が同じ場所に3~9カ月とどまる。平均滞在期間は6カ月。
- ・収入について、年間2万5,000ドル未満がその6%、2万5,000~5万ドル未満が18%、5万~10万ドル未満が34%、10万~25万ドル未満が34%、25万ドル以上が8%となっている。

ノマドのデモグラフィ

ノマドはその79%が男性である。同時に、彼らの多くはヨーロッパ諸国にルーツを持っている。とはいえ、ノマドは種々さまざまな年齢、生い立ち、職業、文化を持った人間の混合といっても間違いはないだろう。その意味では、ノマドはまさに国際的な文化なのである。

ノマドと職業

職業斡旋会社フレックスジョブ(Flex Jobs)は、昨年、1,000人を超すノマドに、自分が一番従事したいと考えている職業は何かというアンケートを取っている。それによると、彼らが希望する職業のトップは、ライティング(ライターになりたい)、教育とトレーニング(自分の経験を生かして、若い人の教育に携わりたい)、経営(小さい会社でもよい、自分の会社を経営したい)、顧客サービス(さまざまな人に会える顧客サービスに関係したい)、アート&クリエイティブ(広告代理店、ア

ートギャラリー、アニメーション会社、ファッション業界などでクリエイティブな仕事をしたい)など。ほかにコンサルタント、マーケター、プロジェクトマネジャーなどであった。特に物書きになりたい希望は、ノマドの間で非常に多く、旅行ライター、ライフスタイルライター、トレンドライター、文化アナリストなどの

分野の記事やエッセーを書きたいという希望が強かったようだ。

終わったオフィスの時代

ノマドのサポートビジネスともいえるAirbnbのCEOブライアン・チェスキー(Brian Chesky)は、デジタル・ノマドの台頭で、「従来のオフィスの時代は終わった」と『タイム』誌に書いている。“世界のあらゆるところで働く”(The Work-anywhere-in-the-world)トレンドが労働者の普通の生き方になるのだ。パンデミックの最中、ウォールストリートの銀行家、ヘッジファンドのマネジャーなど、いわゆるホワイトカラーの多くが大都会を脱出し、小さいバンを住居にして、あちこちの土地や場所での生活をエンジョイし始めた。ニューヨークやパームビーチ、コネチカット州やニュージャージー州を捨て、それまで経験したことのないエキゾチックな田舎や名も無い外国の街に移住した。メキシコ、南米、北欧などにアメリカ国籍の人間が姿を見せ始めた。事実、そういった人たちに進んでビザを提供する国や街も現れた。バルバドス、エストニア、バミューダ、ジョージアなどがそれだ。米国国内でも、例えばハワイのような観光都市は、デジタル・ノマドを誘



世界を旅しながら仕事をするノマドワーカーたちのライフスタイルは、ワーク・ライフ・バランスについても新たな視点をもたらしてくれる

致するために、彼らに対してさまざまな便宜を図り始めている。これまで人生の輪から滑り落ちた人だけのライフスタイルだったRV(Recreational Vehicle)を我が家として、米国各地を転々とする人々も最近は多くなった。この動きはミレニアル、ジェネックス、ベビーブーマー、サイレント・ジェネレーションなど、幅広い年代で広がっている。世界で最も大きいといわれる6万人の会員を持つエスケープーズRVクラブ(The Escapees RV Club)のメンバーの多くはデジタル・ノマドだ。そしてその多くは旅と冒険をこよなく愛し、自らのライフスタイルを維持するために、多少の不便は物ともしない人々たちなのである。

パンデミックは、米国人に限らず、世界のあらゆる人に苦痛を与えた。だが同時に、人間の目を開かせてくれた。週に5日、時には6日、1日に8時間近く、オフィスという四角な箱の中にとどまっている必要がないことを教えてくれた。就職戦線の活性化と相まって、いまアメリカの労働者たちは、働き方に多くのオプションを持っている。そして、世界のどこからでも通勤できるノマド生活は、その最も魅力的な、最も望ましい働き方の一つになっているのだ。